

言葉による教育の原理および方法に関する研究

— 『入木抄』を中心とした書論の記号学的分析を通じて—
(3) 「能」を示す評価の言葉①—空海「風信帖」—

古 市 将 樹

A research about educational principle and technique, which based words
—A case study : Analysis of “*Jubokushou*” and other “*Shoron's* (Calligraphy
theorys) by the knowlege, experience, philosophy of the semiology—
(3) The words which indicate evaluation criteria about “*Nou*” (Can) ①
— Letters, known as *Fushin-jou* by Kukai —

Masaki FURUICHI

2017年9月8日受理

抄 録

尊円親王『入木抄』の言葉だけによる教育の原理と方法を分析するにあたり、そこに登場する能書に関して、「能」がどのような基準で評価されているのかを明らかにするために、『入木抄』における伝承・伝説的な語りと、現在の言葉のちがいを確認する。本稿はその第一弾である。このために本稿では、具体的な能書として空海に注目した。空海の書一般と「風信帖」に対する現代的な評価がどのようになっているのかを資料に求め、評価にはなんらかの傾向がみられないかを分析し、その問題点について触れている。これは本研究全体の中で、『入木抄』に登場する「能」の分析の試論的な位置をしめている。

キーワード：書論、『入木抄』、空海、「風信帖」、評価の言葉

はじめに

本稿は、本研究「言葉による教育の原理および方法に関する研究—『入木抄』を中心とした書論の記号学的分析を通じて—」の一環として、その場での揮毫の実践をともしなわず言葉（口伝）によってのみ書を指南する尊円親王の書論『入木抄』において、「能」、すなわち優れた書の評価がどのようになされ、伝えられたのかを探ることを目的として、具体的な「評価の言葉」に注目、分析しようとするものである。その第一弾として、今回は、主に空海（弘法大師）の書についての評価、特に具体的な書とし

て「風信帖」の評価の言葉に焦点を当てる。

1. 『入木抄』における空海に関する記述

『入木抄』では、書の心構えから、稽古の方法、書道具に至るまで、書の指南全般に言及されているが、その中でも、繰り返し、能筆に学ぶことが語られている。同書に挙げられている能書は、日本人だけで25名に及ぶ。その一人が空海である。それでは、空海については、どのように語られているのか。空海が登場するのは次のふたつの条においてである⁽¹⁾。

まず、「異様の事を不可_レ好事」の条において、空海は以下のように記されている。

初心の時、器量ある人、ひだり字・たふれ字・うつほ字等、筆に任て書候事、よに有_レ興てうらやましく覚候也。随而書_レ之に、其骨あれば人も此事をもてなし、我也乗_レ興の程に、一向これが正宗になりて、本躰の稽古は次になり、返々しんしゃくすべし。かかる事をこのむ人の手跡は、さ程の事をかきたるはさるやうに見ゆれども、極信なる清書は、いかにもひが事かきたるにはおとりなり。はなはだ本意なきなり。これを好みもちるはやすき事也。只いくたびもうるはしくまさしく書事大事也。大道は遠くして難_レ随、邪径は近くして易_レ踏おぼえ、か様のそゞろ事には心を入る人おほく、殊に器量の人ありぬべき事也。能々可_レ謹慎也。

弘法大師は、大唐にて、左右の手足ならびに口に筆をさしはさみて、五行の字を一度に書て五筆和尚の名を得たり。日本にては、応天門の額を門上にかけて後、応字の上の円点を、下より筆を投て被_レ加たり。大権の垂跡也。入木の達者なり。たとひ権者にあらず候とも、大師程の能筆ならば、いかでか不思議を現ぜざらん。たとひ能筆の達者ならずとも、権者現化として、自餘の不思議多候へば勿論也。今人末代に及て、如_レ此の跡を心にかくべからず候歟。大文字など時々書候、有_レ興事也。又、筆の勢も出来、且又、壁字等には御用の事も可_レ有候⁽²⁾。

この条では、初学者は「ひだり字」などの「異様」の書に魅力を感じるかもしれないが、それによって本来の稽古が疎かになることを戒めている。その最後に空海が登場するが、その内容は「五筆和尚」と「応天門の額」の伝承・伝説であった。しかもそれらは、空海が「権者現化」であることを示し、「能書」を超えていることの紹介といえるであろう。

次に「入木道の一芸、本朝は異朝に超たる事」の条において、空海は以下のように記されている。

弘法大師入唐の時、王宮壁字、王羲之筆一間破損。依_レ無_レ其仁_一、闕_レ之。大師奉_レ勅書_レ之。普代より唐朝に至まで、久絶たる道を被_レ興了。又、道風が申文にも、万里の波濤を隔て、名を唐国に駆と書たり。文時・匡衡等が文にも、此詞を書載歟。測知、此道本朝に抜群の人多しと云事を。依_レ之、諸道唐朝之風を移すといへども、手跡の事は、唐書の説あながちに不_レ用_レ之。

行成卿以来、累家の庭訓相統す。此口伝の外他説を不_レ用候也。随而、近来宋

朝の筆跡、多分非_レ神妙_レ候。当世文学の輩、宋朝の筆跡を模する間、公宴懐紙或は論旨・院宣に、頗異跡、不_レ可_レ然事候也。又舊は旧、盧は庖、如_レ此の約束の抄物字、難_レ用事也。聖教にも如_レ此抄物字多し。菩薩は■〔「ササ」を上下に重ねた合字〕、菩提は■〔ササ+才〕等也。然而抄物の外は不_レ書也。

本朝は、毎事跡を追て、国風を不_レ失也。異朝は不_レ然。先代の旧風を改て、当世の風俗を流布せしむる也。仍筆跡も皆改也。硯の作様も、古今事異也。本朝は、魚養薬師寺の額を書、是用_レ能書_レ最初也。一筆に書候由申伝たれども、今之を見るに趁字のごとし。誠に不可説の跡也。其筆跡も只当時に不_レ違。其後聖武天皇・良弁僧正・光明皇后・中將姫^{当麻曼茶羅感得人也}・弘法大師・嵯峨天皇・橘逸勢・敏行・美材等まで、大旨一跡也。筆は次第にたふれたる様に成也。其後聖廟拔群也。聖廟以後、野道風相続す。此両賢は筆跡相似たり。佐理・行成は、道風が跡を写来。野跡・佐跡・権跡、此三賢を末代の今に至まで、此道の規模として、好事面々、彼遺風を摸也。仍本朝の風は、不二相替一者也⁽³⁾。

この条では、書の本家ともいうべき唐の書が衰退し宋の書風が日本でも流行しているが、それとは別に日本風の書の伝統的な流れがあることを示している。そのはじめに空海が登場しているが、ここでもやはり王羲之筆とされる壁書きの破損している部分を空海が補ったという伝承・伝説がその内容である。しかもそれは、勅を奉じておこなったとされている⁽⁴⁾。

このように『入木抄』において、空海に関しては、日本においても唐においても能書として認められているその所以が、伝承・伝説をもって記されており、その書のどこがどのように優れているから能書であるのかの具体的な説明はない。それでは、『入木抄』の頃よりも書道の研究が進んでいるであろう現在、空海の書はどのように評価されているのだろうか。

2. 先行研究における空海の書に関する評価—評価のタイプ—

現在、書道の辞典・辞書には必ずといっていいほど空海に関する項目があるが、彼の書一般を優れているとする、全般的な価値判断的な理由についての記載はかなり少なく、もっぱら歴史的事実の客観的な内容が記されている。そこで、書道に関する書籍・論文などを調査したところ、評価のタイプの一般的な傾向がみえてきた。これについては、以下のような資料がある。それらを便宜的番号をつけて発行年順に列挙する。なお、[]内は初出年である。

①藤原茂（鶴来）『和漢書道史』1927（昭和2）年。

日本三筆の随一にして、其書は神韻飛動し、情緒豊かにして気品高く、筆激すれば急湍となり、筆沈めば洋々大海の如く変化自在なる洵に人をして自ら囉醉はしめ、諸体皆秀拔、ゆくとして可ならなくはなく、又、書論口訣より製筆法に至るまで通_レ曉してゐた。こゝに古来入木道の祖と仰がれる所以がある⁽⁵⁾。

記憶すべきは、大師の書に三十帖策子・風信帖・灌頂記等の如く天真流露せる率意の書と、益田池碑・五悔文・七祖讚の如く、毛筆にてなし得る、あらゆる技

巧を尽くした書との二面がある事である。若し此一をとり他を顧みぬ者があるなら、未だ大師の書を解せぬと言はねばならぬ。大師一生の書には変化がある。壮年の書は晋唐風の大成、晩年の書は所謂大師流といふもので、後に起る和様風の素因をより多く含んでゐる。故に和様風の始組は空海といふべきであらう⁽⁶⁾。

②内藤湖南「大師の書風と真蹟の再吟味」1934年（昭和9）年。

其の書風で言ふと最も多く顔真卿の感化を受けて居るやうで、それが即ち我邦当時の書法を一変した所以である。其の細かい楷書などには既に柳公権などのやうな風を開いて居る点も見える⁽⁷⁾。

③「弘法大師研究座談会」1934年（昭和9）年。

豊道春海〔発言〕「後世大師に対する観察を謝つて投筆の様なものを奇々怪々としてゐるのは大師の徳を傷けるものと思ひます。矢張大師の書は風信帖灌頂記とかいふものに本当の価値を存すると思ふ。老巧の大師が少壮時代に確りした字を書いて居ります。大師の事業から考へてふざけた人を驚かす様な事をやつたとは思はれません。それは大師を穿違へて大師にあやからうといふ後人の謝つた観察ではないかと思ひます。」⁽⁸⁾

④富田敦純「天才弘法大師」1934年（昭和9）年。

大師自身の文字は其の源を声字即ち実相に発するので、支那文字を単なる芸術として学ぶのとは全く根柢を異にするものがある。茲に始めて日本独特の書法が顕れて来たのである。此の大師独特の文字が日本書道の開祖として尊ばるゝ所以である⁽⁹⁾。

⑤岡山高蔭「大師の書風及び真蹟の研究—並に大師の用筆の研究—」1934年（昭和9）年。

我々が驚く事は大師が唐に於て会得された書の奥義を更に他の方面より得たる或ものを応用して、古来未だ見ざるところの書を書かれたといふ事である。之は〔中略〕飛白の書体を行草に加味せられたことであつて之は支那歴代の法帖を調べて見ても之程奇抜なものは見当たらぬのである⁽¹⁰⁾。

⑥伊木壽一『日本書道の變遷』1935（昭和10）年。

空海は篆隸楷行草乃至飛白梵字までも、行くとして可からざるはなく、殊に王羲之を慕ひ、その書風には頗る羲之の面影がある。併し単なる模倣ではなく、よくその真髓を掴んで自家薬籠中のものとなし、見事に独創の風を出してゐる。蓋し彼自らも云つてゐる通り、古跡を写すにあらずして古意に擬したものであらう。かく彼の書風が前人未発のもので、而もその書風が天下後世に多大の影響を与へてゐるところが、空海の空海たる値打ちであり、また彼が我が入木道の元祖として永く景仰せられる所以でもある⁽¹¹⁾。

⑦野本白雲「大師の書道」1980（昭和55）年 [1954（昭和29）年]

これ等の書〔大師以前の名筆〕がいかなるものであったかをひきくるめて云えば、悉くが晋唐の模倣であつて、しかもいかにしてこれに、より近づくべきかに腐心した跡を見るのである。大師とても晋唐を模範としたことは勿論で、寧ろ大

いにこれを学んだものである。しかし大師は一少しむずかしい言い方であるが一概にその奴書とならず、却って自ら主となり、醇乎たる日本様を建設したのであって、これは、全く以て偉大とせざるを得ない。まことに和様は大師をもって開組とするのである⁽¹²⁾。

大師の書には相異なる二方面がある。一つは「風信帖」、「灌頂記」を代表とする卒意の書と、今一つは「益田池碑」を代表とする遊戯三昧の書とである。一般知識階級の人々は卒意の書を喜び、遊戯三昧の書を甚しく嫌うが、筆法伝授の喧しいいわゆる大師流の人々はこれと正反対で、特に意を用いた遊戯三昧の書を大いに喜ぶと同時に、卒意の書に対しては嫌うというほどでなくても、あまり尊びもしないのである。しかしこれ等の好き嫌いは自ら溺れるところであって、「風信帖」、「灌頂記」など、の卒意の書の貴ぶべきことは何人も異存のない所である。というて、かの「草書座右銘」に仄見えて、「補陀落山碑跋語」、「五悔文」と発達し、「益田池碑」に至って大成を示した遊戯三昧の書も、決して厭うべきでないことは、更めて言うまでもないであろう。

書は元来自然物ではない。一に人間の作りものである。自然を貴ぶのはそのところでなくてはならないが、全然作意を無視する訳にはゆかない。大師の遊戯三昧の作品には、もとより判然している。しかもそれは人が毛筆を用いて文字を書く上になし得るあらゆる技巧を凝らしたものであって、その中にこそ大師の豊富な創造的精神が躍動しているのである。ただ作意は当に大師の如き大家にして、始めて容さるべきで、凡手の浅果な作意は、断じてこれを排斥しなくてはならない。〔中略〕伝教のこの清韻に対し、弘法の書は筆力遒勁で、書としての妙味は余りあるが、一面覇気に満ち、その精神的な粘り強さには多少の嫌味を伴っているようにも思われる。これは大師の機略縦横の性格が、自然に筆端に表われたものである。しかし、これは主観的なものであるから一概にはいわれない⁽¹³⁾。

⑧比田井南谷「空海」1962（昭和37）年。

彼の書は平安朝中期以後の優雅さや、禅僧のわびやさびの味はないけれど、日本の書聖と仰がれ、信仰や文化の推進者にふさわしく、書の技法にしっかりと根ざした実践性がある。彼の性格の多面性は書にもあらわれ、草稿や書状に見られる質朴で自然味の多いもののある半面、筆意の変化や構成に意を用いたものがある。特に後者の面では、この飛白にも見られるように雄大にして超妙、さらに真言密教的な神秘性と荘嚴味も加わり、いまなお我々の心を強く動かす⁽¹⁴⁾。

以上の資料から、空海の書の評価に関しては、いくつかのタイプがあることがわかるだろう。

第一に、②⑥⑦など、当時日本の書が模範としていた中国の書、具体的には、王羲之や顔真卿の書を空海がよく学び、それらの書風を自らのものとしていたという評価である。

第二に、④⑤⑥⑦など、中国の書の模倣にとどまらず、新たな書の創出、謂わば、書における新たな価値の創造をしたという評価である。

第三に、①②④⑥⑦など、これは第二の評価の延長に位置づけられるであろうが、書道具についての精通を含め、日本の書、入木道の開祖という評価である。

第四に、⑧など、宗教や文化における空海の功績、さらには彼の人格的な面も視野に入れた評価である。

第五に、①③⑦など、空海の書の技術的な幅の広さについての評価である。

第六に、①など、書自体が優れていたことの評価である。

これらの評価の中で、第一から第四までの評価は、書自体の価値判断というよりは、それ以外の要因にかなり影響された評価といえるであろう。では、第五・六の評価、特に書自体の評価はなにをもってして可能なのだろうか。具体的な空海の書（尺牘）である「風信帖」の評価に注目したい。

3. 「風信帖」に関する現代的評価とそれにともなう問題点

「風信帖」は、空海が最澄に宛てた尺牘三通が一卷にされたもので、京都の東寺（救王護国寺）蔵の国宝である。空海の書の中のみならず、日本の書全体の中でも最高峰と称されている。この書を分析対象としたのは、空海の真筆とされていることと、先行研究が多いからである。それらを先ほどと同様に列挙したい。

ア) 藤原茂（鶴来）『和漢書道史』1927（昭和2）年。

縦横に揮灑された卒意の書といふが、反つて大師の意を用いたものよりも書品高く、行草の妙趣を遺憾なく発揮し、大師の書中最も秀抜にして、宛然、晋唐の名蹟に接するの想がある。現に京都救王護国寺（東寺）の什物となり国宝中の逸品である。此の手紙はもと五通有つたが、一通は関白秀次に献じ一通は盗難にあひ、残りの三通が蔵されてゐる。一は用筆最も自然の妙を得た行書〔中略〕、一は雄勁を以て優れた行書、一は草書にして、明朗なること、さながら白雲の秋空を流るゝの感がある⁽¹⁵⁾。

イ) 川谷賢『書道史大観』1928（昭和3）年。

いづれも後年の大師流の風は少しもなくて全く王羲之の書を見るやうである。純正円熟と雖も才気縦横にして險峻又高渾少しも迫らざる処大師の偉大を知るに足るものである⁽¹⁶⁾。

ウ) 鈴木春視（翠軒）『新講書道史』1933（昭和8）年。

弘法大師が伝教大師に与へた書簡で入念の書ではない。然るに行草の妙所を發揮せること大師の真蹟中の随一である。これらの書は其の風韻の高きこと羲之の右に出づともいへる。〈中略〉凡そ達人は忙中に閑がある。いかに急遽の場合にも心にゆとりがあり、神身の統一がある。この風信帖にせよ、殊に次の灌頂記にせよ、従来卒意の書といはれてゐるが、それが凡庸人の単なる卒意の書とは異り、所謂筆心一如の偉傑空海の心境を想見しなければならぬ⁽¹⁷⁾。

エ) 鈴木雲洞「鑑賞上より見た大師の書」1934年（昭和9）年。

莊嚴、遒勁、生氣澆刺、いかにも真言宗の開祖としてのその偉大なる気魄を遺憾なく彷彿させるものであります。〔中略〕弘法大師の様な大仏人を今日あらし

めたならば宗教界にも活気があり、思想界の善導も出来教育界にも現代の如き醜き姿もなくなり、浄化され、我が非常時も必ずや力強きを得、殊に書道界には現時の如き唯宣伝のみこれ事として、底に深さもなく、軽挑浮薄な小細工な書道を一掃し得て、人物の崇高と共に、真の隆盛を見るものと切に切に感ぜられる次第であります⁽¹⁸⁾。

オ) 内藤湖南「大師の書風と真蹟の再吟味」1934年(昭和9)年。

東寺に在る風信帖は行草を交へて書いたものであつて其の草書の筆意などには王羲之伝来の筆意を含んで居つて、極めて意を用ゐずして能く出来たものである⁽¹⁹⁾。

カ) 春名好重『日本書道史論』1943(昭和18)年。

その書は行草体にして、既に円熟の境地に達してをり、筆勢流るゝが如く、些かの遅滞凝滞なく、適勁なるも温雅であり、気品高く、風韻に富み、灌頂記と共に空海の書の双璧と云ふべき名筆である⁽²⁰⁾。

キ) 金子鷗亭「解説：風信帖」1980(昭和55)年 [1954(昭和29)年]

第一通目は渾厚にして樸茂、正に顔真卿の争座位帖に迫るものであり、第二通目は痛烈な筆力を示し羲之の風味多く、第三通目は草書体に時に行書体を交えて清澄流麗の趣を湛えている。気宇の博大と、気格の高雅と、用筆の超妙において空海の数ある作中の白眉であるばかりでなく、我国は勿論、中国を含めても、古典の中にあつて燦然と光を放ち、名蹟中の名蹟と言うべきである⁽²¹⁾。

ク) 仲田喜一郎「解説：風信帖」1955(昭和30)年。

この風信帖は、二王の風神をえていて、まことに天衣無縫の妙があり、しかもその筆法を熟視すると、顔法の影響が認められて、おそらく空海その人としても極めて得意の作であつたと思う。ことに三通それぞれ特色があつて、その趣に変化のあるのは、いよいよ空海の妙腕のすぐれていることを痛感せしめる。空海の実蹟中の傑作といつて差支ない⁽²²⁾。

ケ) 堀江知彦「空海筆風信帖」1960(昭和35)年。

風信帖の三通は三通ながらいちいちに面貌を異にしている。第一通と第三通とには中国人に見られない日本人独特の鋭さと清潔感とがあふれている。ことに、第三通は、たとえば、明かるい春の陽光を浴びながら潺々として流れ去る谷間のせせらぎを聞くようなさわやかさである。そうかと思うと、第二通は日本人には珍しいまでのエネルギーあふらつきを見せている。かの軽快みとこの重厚みと、空海という人の書の複雑な味わいには尽きない興趣をそられるであろう。それと同時に、三通に共通する雅致と風韻の高さは、これを書状という単なる実用文字として見過すことを決して許さない大きい魅力である⁽²³⁾。

コ) 飯島春敬(稲太郎)『日本の書』1961(昭和36)年。

手紙三通(縦二九・七センチ)はそれぞれ一面貌があり、第一通(横五七・六センチ)は渾樸重厚で、羲之を祖述した趣きがあり、第二通(横四九・一センチ)は覇気に満ちた雄作であり、第三通(五二・一センチ)は流麗円熟の草体で書写

してある⁽²⁴⁾。

サ) 堀江知彦『日本の名筆』1963(昭和38)年。

能書家として、端正温雅な晋唐の書風を学ぶことによって生み出したかれの書風が、わが国の書道界に幾多の渴仰者を出す結果となったことも、想像にかたくありません。それは、かれの筆蹟として今日に残る風信帖を見ても、その静かな美しさは必ずやわが民族性によく適合すると思われるからです。すなわち、書道界にあっても、中国風への追随というその頃の一般風潮を、空海が能書家であっただけに、さらに盛んなものにしたと考えていいと思います⁽²⁵⁾。

シ) 平山観月『新日本書道史』1965(昭和40)年。

現存する三通はいずれも行草の妙趣を記した率意の筆で、おのおのその面目を異にする特色を有している。〔中略〕〔第一通は〕書風は最も謹厳であるが、やや萎縮した様相を持つ。第二の九月十三日のものは、書風は異色の風があり、峻拔をもってすぐれ、精気が筆端に溢れ、かつ情緒風韻が漂っている。第三通の九月五日付の草書風のもは、最も傑出し、行筆は瀟洒明澄でいささかも凝滞の跡をとどめていない。全体の書風は羲之の体によるが、一方灌頂記同様の雄渾なところには顔真卿の豪宕な影響が認められる⁽²⁶⁾。

ス) 石橋啓十郎『書道概論』1966(昭和41)年。

この風信帖は二王の風趣をえていて、まことに天衣無縫の妙があり、その筆法に顔法の影響が認められ、卒意の書としては、書品が高く、行・草の妙趣を遺憾なく発揮し、渾厚沈着、用筆すこぶる深く、大師の書中もっとも秀抜で得意の書とされている。また三通それぞれの特色を有し、一つは用筆もっとも自然の妙を得た行書、一つは雄勁をもってすぐれた行書、一つは明澄で白雲が秋空を流れるような草書である⁽²⁷⁾。

セ) 春名好重『古筆辞典』1969(昭和44)年。

運筆は巧妙にして円熟の妙境に到達していることを示している。卒意の書らしいが、闊達にして高雅であり、よく洗練されている。書風は晋唐風を基調としているが、空海の個性もはっきり出ている。そして晋唐風を日本化する傾向が表れていたことを示している。空海の筆跡はいずれもすぐれているが、そのうちで風信帖が最も傑出している⁽²⁸⁾。

ソ) 飯島春敬『図説・日本の書』1970(昭和45)年。

空海の書としてもっとも傑出したものである。この手紙三通(竪二九・七センチ)はそれぞれ一面貌があり、第一通(横五七・六センチ)は渾樸重厚で羲之を祖述した趣きがあり、第二通(横四九・一センチ)は覇気に満ちた雄作であり、第三通(横五二・一センチ)は流麗円熟の草体で書写してある⁽²⁹⁾。

タ) 春名好重「解題：風信帖」1975(昭和50)年。

当時の空海の書はよく洗練されて、十分円熟している。字形は大体縦長で、右肩が少しあがっている。これは当時の書風の一般的傾向であり、唐の書風の影響である。特別に技巧をこらすことなく、自由に、自然に書いているが、変化に富

んでいる。書風は王羲之風及び顔真卿風を帯びているようである⁽³⁰⁾。

チ) 堀池春峰「空海 I」1975 (昭和 50) 年。

まさに空海の名のごとく、その筆法は天馬空を行き、限りなく自由に躍動している。伝統的な王羲之の書法をもとに、顔真卿の新書法を加え独自の境地を開き後世に与えた影響は大きく、嵯峨天皇、橘逸勢とともに三筆と称せられている⁽³¹⁾。

ツ) 高木聖鶴「現代書家と風信帖—全人的な書格」1983 (昭和 58) 年。

「風信雲書」にはじまるこの手蹟は前述の諸帖の率意性に対していわゆる刻意に位置する。〔中略〕一見謹厳にして乱れなく悠然として清^マな気は全帖にみなぎり泰然自若としている。〔中略〕私は大師の書について常人にみえざる線質の深い味を感ずるのである。それはある種の余裕のあるよどみの風趣である。よどんでよどまずとでもいうような特殊な風味である。これはその密教的宇宙観から抽出された何かであろうと思うのである。〔中略〕第二通は重厚の書としての空海の一面を端的に表出した作として貴重である。峻厳と豊かな姿態と風趣はまた大師の独壇場である。〔中略〕第三通は気を内に蔵すると同時に極めて解放的であり、清澄にしてさわやかな気趣は観者を魅了する。力を内に秘めた第一通と対照的であり、大師の心象の両極を示して興味は尽きない。ともあれ大師の全人格の投影が風信帖であろうと思う⁽³²⁾。

テ) 春名好重『空海—人と書—』1988 (昭和 63) 年。

消息は刻意の書ではなく、卒意の書である。しかし、能書の空海の書であるから、非常に巧妙であり、優秀である。用筆は巧妙である。特別に技巧を凝らしているようには見えない。しかし、運筆に緩急抑揚の変化がある。変化のない書より変化のある書の方がすぐれていることはいうまでもない。わざと作った変化はよくない。自然に生じた変化がすぐれている。自然に生じた変化というのは洗練された書であり、円熟した書である⁽³³⁾。

ト) 相川政行・藤木正次監修『書の手帖』1991 (平成 3) 年。

風信帖は手紙にもかかわらず、落ち着いて周到に書かれ、率意の書ではない。字形が正しく、懐が大きく豊穡で重厚味があり、三通三様の趣の変化がある⁽³⁴⁾。

ナ) 石川九楊『日本書史』2001 (平成 13) 年。

日本で書聖と呼ばれ、日本の書を象徴する空海の書は、実は、複雑怪奇な、いわば現在の我々が、本気で目に止める気にもならない、奇異な表現を基盤としていたことは、直視した方がよいように思われる。「聾瞽指帰」に発する一連の書の中で、その奇異、奇怪の表現のもっとも少ない書が、「風信帖」「忽拔帖」「忽恵帖」の三紙からなる手紙、いわゆる「風信帖」である。当時の判断からは、空海らしい魅力のもっとも少ない手紙の書が、空海らしい魅力をもたないがゆえに、現在の目からすれば、当時の書の中ではもっともすぐれていると判断される⁽³⁵⁾。

美しいかどうかの判断については異論もあろうが、中国には見られない繊細な書きぶりが「風信帖」に出現している。〔中略〕いずれもこれらの箇所筆尖が低空を移動し、細かな微動を伴う繊細な移行形を残しているが、この微妙な書き

ぶりは中国には見られない。そしてこの繊細な筆触は聖武天皇の「雑集」に始まり、やがて生まれる平安時代中期の女手の書と臍帯をつなぐ表現である⁽³⁶⁾。

戦後の前衛書を中心とする書道家達は、空海の書というと「灌頂記」を第一に持ち出し、三帖の「風信帖」の中では第一紙の「風信帖」を褒め讃える。それは、中国清朝期に党派的な解釈を確立した、筆尖は筆画の中央を通ると言われる中鋒説が、日本では異常に拡張されて「筆尖は紙に対して垂直に立ち、筆尖は筆画の中央を通るべし」と理解され、筆尖が筆画の外側を通るいわゆる側筆の筆触を理解しようとしなからである⁽³⁷⁾。

ニ) 島谷弘幸・富田淳「人と作品でたどる 日中能書列伝」2006(平成18)年。

唐に学んだその書は、王羲之はもちろん唐の能書・顔真卿の書風をも手中にし、豊潤にして重厚、闊達な雰囲気を感じさせる⁽³⁸⁾。

ヌ) 山本まりこ「解説」2012(平成24)年。

1 通目には沈着さ、2 通目には筆力、3 通目には気品が際立つ。〔中略〕〔1 通目について〕高雅な筆致は多面的で八面玲瓏の様相。叡知・高い精神性・研ぎ澄まされた感性を兼ね備えた空海の傑作の一つ⁽³⁹⁾。

ネ) 横山燈平「作品解説：風信帖」2016(平成28)年。

空海四十歳前後、入唐後の書で、遺墨中最も有名な名品。伝統的な王羲之書法に加えて、渡唐中に得た顔真卿等の新書法の影響も覗かれる。三通とも各々異なり、忽卒な書きぶりの中にも、多彩で円熟した独自の境地を示している。また、この書から晋唐風を日本化する新たな傾向も顕著にみられる⁽⁴⁰⁾。

以上の資料を、先に分類した第五・六の評価のタイプに当てはめたとき、ある傾向がみえてくる。それは、仮に物理性と精神性とでもいえるであろう意味をもつ言葉による評価がなされていることである。

物理性については、例えば、ア) 行草の「妙趣」、用筆の「自然の妙」、「雄勁」、エ) 「適勁」、キ) 「清澄流麗」などである。一方、精神性については、例えば、ア) 「卒意」「書品」、イ) 「才気縦横」、ウ) 「入念」、エ) 「莊嚴」「生氣澆刺」、カ) 「温雅」「気品」、キ) 「高雅」、ク) 「天衣無縫」、シ) 「情緒風韻」などである。これらをまとめると、「風信帖」に関しては、どうやら、筆力が強く、同時に、流れるように自然体で無駄がなく、精神的な無理もしない、といったところで高く評価されているといえるであろう。そうであるとすれば、それはなぜなのか。

これらの言葉については、「趣」のように、両方にまたがる言葉もある。また、言葉自体の使用頻度や傾向が時代ごとに異なるであろうし、それぞれの筆者のそこに込めた意味と文脈における意味が一様とは限らない。さらには、ナ) の中で指摘されているように、理解の流行的な問題もある。したがって、このように単純に分けることは、本来むずかしいであろう。それでも、概観すれば、長期的に使用されている、定番ともいべき言葉があった。例えば「卒意」である。なぜ「卒意」であることが評価されるのだろうか。これについては、既に飯島太千雄が、

書道史の方でも、稚拙も個性の内だと思うのであろうか、やたら稚拙なものを大

事にしたり、典型より非典型を過大評価したり、色々妙なことが行なわれる。そうした一つに、卒意の書の過大評価がある。〔中略〕悠久三千年の書の歴史は、誰彼が素晴らしい卒意の書が書けるようになるために、流れて来たのでは、決してないということである。美しい書、立派な書、より機能的な書、それへの希求が書の歴史の原点であり、原動力であった筈である⁽⁴¹⁾。

と、同様の疑問を呈している。ただし、本研究において、これは「卒意」が評価の基準として間違っているということではない。問題は、それが基準となってきた歴史・系譜である。この流れの中で、何が選択され、何を失ってきたのか。飯島のいう「希求」が書の原点・原動力であったとして、そこに「卒意」がなぜ・どのように入り込んできたのだろうか。同時に、それによって、日本の書はどのように変じたのだろうか。さらに本研究に即していえば、『入木抄』において、この「希求」がどのように意識され、語られていたのか否かである。

そのために、本稿では「風信帖」の評価の言葉に焦点を当てたが、「灌頂曆名」など空海の他の真筆、さらには三跡の真筆についても同様の調査、特に、言葉のより精緻な分析をおこなわなければならない。具体的には、コノタシオンやデノタシオン、レトリックなどの諸概念をはじめとした記号学的な知見を用いた分析である。そして、その結果と、『入木抄』における語りを比較検討しなければならない。

(本稿つづく)

註

- (1) 正確には、「本朝一鉢なれども、時代に付て筆跡分明事」の条にも「弘法大師」の名前があるが、これは、弘法大師以降の日本の書について記すためだけに登場しているので対象外とする。
- (2) 伊藤緑苔『入木抄の研究』中部日本新聞社、1965年、106～107ページ。
- (3) 同前、111～112ページ。
- (4) なお、「五筆和尚」と王羲之の壁書きのはなしは、空海について書かれた資料に散見される有名なものであるが、それらはみな一様ではない。次の資料に付録されている橘行精『本朝能書伝』（安政3年：1856年）においては、ひとつの伝承・伝説として記されている。岡麗（校訂）『入木道三部集』岩波文庫、1931年。
- (5) 藤原茂（鶴来）『和漢書道史』好鶯會、1927（昭和2）年、239ページ。
- (6) 同前、239～240ページ。
- (7) 内藤湖南「大師の書風と真蹟の再吟味」『書道』第三卷第三号、1934年（昭和9）年3月、40ページ。
- (8) 「弘法大師研究座談会」『書道』第三卷第三号、1934年（昭和9）年3月、33ページ。
- (9) 富田敦純「天才弘法大師」『書道』第三卷第三号、1934年（昭和9）年3月、26ページ。

- (10) 岡山高蔭「大師の書風及び真蹟の研究—並に大師の用筆の研究—」『書道』第三卷第三号、1934年（昭和9）年3月、9ページ。
- (11) 伊木壽一『日本書道の變遷』岩波書店、1935（昭和10）年、29ページ。
(12) 野本白雲「大師の書道」『定本書道全集 第9巻 —三筆・三蹟とその時代—』名著普及会、1980（昭和55）年〔河出書房新社、1954（昭和29）年刊の複製、監修：尾上八郎ほか〕、183ページ。
- (13) 同前、185～186ページ。
- (14) 比田井南谷「空海」毎日新聞社図書編集部『書と人』毎日新聞社、1962（昭和三十七）年、8ページ。
- (15) 藤原茂（鶴来）『和漢書道史』、242～243ページ。
- (16) 川谷賢『書道史大観』甲子書道会、1928（昭和3）年、32ページ。
- (17) 鈴木春祝（翠軒）『新講書道史』東洋図書、1933（昭和8）年、110～111ページ。
- (18) 鈴木雲洞「鑑賞上より見た大師の書」『書道』第三卷第三号、1934年（昭和9）年3月、106ページ。
- (19) 内藤湖南「大師の書風と真蹟の再吟味」、1934年（昭和9）年3月、43ページ。
- (20) 春名好重『日本書道史論』泰東書道院出版部、1943（昭和18）年、70～71ページ。
- (21) 金子鷗亭「解説：風信帖」『定本書道全集 第9巻 —三筆・三蹟とその時代—』名著普及会、1980（昭和55）年〔河出書房新社、1954（昭和29）年刊の複製、監修：尾上八郎ほか〕、192ページ。
- (22) 仲田喜一郎「解説：風信帖」下中邦彦編『書道全集 第11巻』平凡社、1955（昭和30）年、155ページ。
- (23) 堀江知彦「空海筆風信帖」『MUSEUM：東京国立博物館研究誌(115)』、1960（昭和35）年10月、9～10ページ。
- (24) 飯島春敬（稲太郎）『日本の書』書芸文化院、1961（昭和36）年、55ページ。
- (25) 堀江知彦『日本の名筆』木耳社、1963（昭和38）年、216ページ。
- (26) 平山観月『新日本書道史』有朋堂、1965（昭和40）年、97～98ページ。
- (27) 石橋啓十郎『書道概論』日本習字普及協会、1966（昭和41）年、211ページ。
- (28) 春名好重『古筆辞典』三彩社、1969（昭和44）年、367ページ。
- (29) 飯島春敬『図説・日本の書』書芸文化院、1970（昭和45）年、36ページ。
- (30) 春名好重「解題：風信帖」中田勇次郎編『書道芸術 第十二巻』中央公論社、1975（昭和50）年、194ページ。
- (31) 堀池春峰「空海Ⅰ」今井庄次〔ほか〕編『書の日本史 第2巻—平安—』平凡社、1975（昭和50）年、99ページ。
- (32) 高木聖鶴「現代書家と風信帖—全人的な書格」『別冊 墨 第3号 空海の世界—弘法への軌跡—』芸術新聞社、1983（昭和58）年、114ページ。
- (33) 春名好重『空海—人と書—』淡交社、1988（昭和63）年、110～111ページ。
- (34) 相川政行・藤木正次監修『書の手帖』小学館、1991（平成3）年、99ページ。

- (35) 石川九楊『日本書史』名古屋大学出版会、2001（平成13）年、101ページ。
- (36) 同前、109ページ。
- (37) 同前、110ページ。
- (38) 島谷弘幸・富田淳「人と作品でたどる 日中能書列伝」『目の眼』No.352、里文出版、2006（平成18）年、30ページ。
- (39) 山本まりこ「解説」名児那明監修『別冊太陽 日本の書』（191）、平凡社、212（平成24）年、44ページ。
- (40) 横山燈平「作品解説：風信帖」読売新聞社編『王羲之から空海へー日中の名筆漢字とかなの競演』読売新聞社、2016（平成28）年、335ページ。
- (41) 飯島太千雄『空海大字林（解説）』講談社、1983（昭和58）年、38ページ。

なお、本稿で参考とした資料に、空海に顔真卿の影響があるとするものがいくつもあるが、これについて前掲『空海大字林（解説）』において飯島は、

灌頂曆名や風信帖に顔法があるとし、空海が唐土で顔真卿を学んだとする説がある。〔中略〕大体この種の説は、権威者の説を踏襲した無責任なものが多く、論拠を示した論は管見に及ばない。〔中略〕長安の空海が、顔真卿の正書碑を観たことは、想定し得ることである。空海の楷書の遺例は少なくないが、顔法を現わすものは皆無である。顔法は、本来的に楷書法であり、顔法を取る者は、先ずはそこから入らなくてはならない。然るに、空海の楷書に、その片鱗すら認められないことは、顔法を学ばなかったとしか考えようがないことである（26ページ）。

と指摘している。飯島のいう「論拠を示した論」、学術的には当然のことであるが、それと、「権威者の説を踏襲した」ものとの区別が、本研究にも求められる。

- 引用文中の〔 〕カッコ内は古市による。
- 本稿中、アンダーラインは古市による。
- 本稿は科研研究課題（15K13193）の一環である。

